

タイトル	文化・文明と技術：「言語と文化」考(2)
著者	岡野， 哲
引用	北海学園大学人文論集， 13： 1-30
発行日	1999-07-31

文化・文明と技術——「言語と文化」考(2)

岡 野 哲

Summary

In this second instalment of the series of essays on “Language and Culture”, it is attempted to make clear how culture and civilization are interrelated. In the course of this research, the definition of both culture and civilization should remain as they had been in the previous paper, and it turned out to be the case that technology and technological development play crucial intermediary function in the interaction of culture and civilization. As the starting point, Aristotelian concept of technology was taken up and applied to this research all through. That proved to be feasible from the earliest stage of the evolution of Homo sapiens down to the latest state of advanced scientific technology. When different kinds or levels of technology came in contact, some technologies extinguished, some others came to vary their status in society, surviving as artistry, for instance. This process of status change can be distinguished in type.

Any application of technology produces impact upon nature and society, mostly deteriorating natural and cultural conditions drastically, occasionally causing relatively harmless gradual changes which had left long lasting cultural values.

In the present day technological development, there is the exercise of its devastating power towards culture, not only in developing societies, but inside advanced civilized countries. But there is no difference in kind in technology's influencing the interrelationship between culture and civilization.

Key Words: *Technology, Culture, Civilization, Development, Society*

序に代えて

前稿、岡野 哲(1997)を執筆発表の時と前後して、同じ様なテーマを掲げて多くの論述が公にされた。¹⁾筆者には、それら全てに対する目配りと吟味につとめるべきであるという義務感が、重く申し掛かっていたのは当然である。しかしながら、種々の制約のもとで可能な限りの努力を払うことで次の仕事、すなわち本稿のまとめに取り掛からざるを得ず、ここに標題の意味する諸問題の一部について見解を明かにするものである。

岡野(1997)においては、「文明」と「文化」を混同しないことの重要性の認識から出発して、「文化」を比較的小さい——時としては、家族のような——社会集団の単位のメンバーの中に伝統的に生きる内面的な生き方の側面から捉え、一方、「文明」については、これを、異なる文化を超えて、より大きな範囲に拡散・伝播するような普遍的な合理的・合目的な思想・制度・技術などとしての生活のあり方として把握した。「文化」と「文明」の概念のこのような理解については、多くの論者に共通点が認められ、筆者が敢えて縷説するまでもないほどである。本稿においても、この視点を基本として維持するつもりである。

ただ、S. ハンチントン(1998)²⁾においては、事情が異なる。彼においては、上述の特徴づけは暗示的に認められているものの、それに加えて「文明」は一種のパラダイムであって、“最も範囲の広い文化的なまとまり……人を文化的に分類する最上位の範疇”³⁾で、“人類を分類する最終的な枠組み”⁴⁾であるという立場を明らかにしている。これについては、ハンチントンが政治学者であり、アメリカを代表する戦略論・国際関係論の専門家であるという立場から立てた、特別な論述の基本的な概念的枠組みであるという事に留意すべきである。

I. 何を技術というか？

今日に生きる我々は、技術という言葉がもつ歴史を考えることはしない。

しかし、我々が理解しているような「技術」の意味が一般に広まったのは、決して古い昔ではない。飯田賢一(1995)が明らかにしているところでは、⁵⁾紀元前1世紀の中国の文献に現れる「技術」は〈てわざ・方術・藝術〉の(英語で云えば〈craft〉に近い)意味であった。一方、西欧では、アリストテレスによって人間の精神的認識の活動の一つとして、テクネー(=技術)がエピステーメー、ソフィア、などと並んで掲げられているという。わが国では、19世紀に到ってようやく欧米の文明と接触を深め、今日におけるのと近い意味で「技術」が用いられ始めるが、それが定着するには、福沢諭吉、西周、久米邦武、佐野常民などの開明的な知識人の文筆活動を経て、産業・金融資本主義の社会態勢が確立する20世紀前半に「科学技術」として論じられるまでの年月を要したのであった。

さて、本稿では、論述の出発点としてアリストテレスをとることにする。彼にとっては、技術(テクネー)は学問(エピステーメー)と共に、“経験を介して人間にもたらされるもの”⁶⁾であり、その能力の獲得は“学習によるもの”⁷⁾である。また、その能力の働きは理論的認識に対して制作的認識とでも云うべきもので、⁸⁾さらに、“一般に、技術は、一方では、自然がなしとげえないところの物事を完成させ、他方では、自然のなすところを模倣する”。⁹⁾ある出来事が自然的な条件と原因によって起きる場合と、“人工的に行われる”¹⁰⁾(すなわち、「技術的に生起する」)場合とに違いがないのは“技術は自然を模倣しているのだから”¹¹⁾であるが、その原因には「質量因」による必然性と「目的因」[=目的適合性]によるものがある。¹²⁾

わざわざアリストテレスを引合いにだしたのは、彼の述べた上記の言葉の中に、技術を考えるために必要な殆ど全ての基礎的な概念が含まれているからである。しかしながら、アリストテレス(BC. 384~322)といえども、人類の考古学的な長い歴史のパースペクティブに立ってみれば、つい昨日まで生きていた我々と同じ人類の一員である。すなわち、逆に云えば、人間としてのアイデンティティに基づいて発せられた彼の言葉は、それより遥かに時を遡る、「自然」の状態でヒトが生きていた考古学的時代に思いをいたさしめるものである。我々は、多くの生き物がヒトと共に自然の一

部としてこの地球に棲息していること、彼らの棲息状態を考察すると、彼らが互いに何等かの相互関係の中で生きているという事実を思い返すのである。¹³⁾

ところで、人間が道具を用いるのに等しい有目的の行動を、ある種の猿の行為に認めることがある。つまり、自分の欲するものを手に入れるために、道具と思われる物を利用するのである。これをみれば、進化の系統を遡ったある段階で、人類と関係するある種の動物が、これと同様の行動形態を獲得していたであろうことは容易に想像することができる。しかしながら、さらに重要なことは、道具を利用することから、人工的に火を起こすことができるようになったという進歩は、人類以外のどの生き物も到達し得なかった段階である。人類学者、埴原和郎(1997²⁾)の言葉によれば、“猿人時代の道具の発明を文化の第一革命とするなら、原人段階の火の使用は文化の第二革命ともいえる。”¹⁴⁾

原人がどのような方法、手段、道具等を用いて火を起こすことができたかは詳かにしないが、火は原人が起こす以前に自然の中で経験することができたであろう。例えば、火山の爆発による火災、乾燥した森林に起こる山火事、などの経験が原人に繰り返されたと想像できる。この様な経験の積み重ねから、原人は何等かの道具を用いて火を起こすことを学ぶに到ったと想像しても見当はずれではあるまい。すなわち、アリストテレスの言葉に従えば、「経験」を通じて獲得した「制作的認識」が基礎となって、一定の「目的のために」——例えば、食べ物の調理のために、あるいは、暖をとるために——、人工的に火を起こす「技術」を学習したということである。

種々の道具の作製は、何等かの技術を基礎としたことは云うまでもない。また、火をつくる道具が原人の最初の技術を意味するという訳ではない。しかし、火をおこす技術にともなって、様々な他の道具の作製が付随的に必要となり、それによって、各種の技術がさらに発達したことは容易に想像できるのである。しかしながら、今日、我々の身近に火をおこす事を特別な技術であると考え人を見いだすことは殆どできないであろう。それは、余りにも日常的で、且つ、容易な営為だからである。

だが、非日常的な条件 ― 例えば、野宿のような ― のもとでは、火を起こすことに困難が伴うことがある。そのとき、どの様にしてもそれができない人と、どの様にしても比較的容易に困難を乗り越えられる人がいる。後者の人は「骨(こつ)」 [=knack] を心得ているという。つまり、これは「要領」とでも言い替えられる能力であるが、これを「技術」と云うことは稀であろう。「技術」は学習して ― 伝承を含む ― 獲得するものであり、単に個人の器用さ [=cleverness] に依存するものとは区別されるであろう。

また、「技法」という言葉がある。今日では、文学・音楽・美術などの表現上の方法をいう。それが優れていると認められる場合は「技巧」となる。また、制作されるものが自然との間に距離をおくとき、その「技(わざ)」 [=art] は「技藝」 [=artistry] となる。その意味で、アリストテレスのいう“自然を模倣する” ような「技術」とは異なる。

しかし、法隆寺の宮大工、西岡常一は、木造建築という自然に密接した「わざ」の使い手として、自分の「わざ」を「技術」と呼ばずに「技法」という。その理由は、“自然の生命の法則のまま生かして使うという考え方”¹⁵⁾にあるという。西岡常一の話は、俳人、森 澄雄の関心を呼ぶ。森 澄雄は俳句の学び方との関連で、西岡のような宮大工の棟梁は、何年もかけて道具の研ぎ方を先ず教え、それから鉋を一回かけて、その鉋屑を弟子に与え「鉋屑はこういうもんや」と教えると述べ、弟子は“透き通るように薄く削った鉋屑を窓ガラスに貼って毎日、黙って練習する”¹⁶⁾のだと語る。俳句もそのような刻苦勉励を要するのだ、という事を述べているのである。

同様に、「自然の生命の法則」(西岡常一)に従って営まれる「制作」(アリストテレス)の過程は、日本に伝統的な和紙の紙漉の工程、¹⁷⁾ 日本酒の醸造の工程(もちろん、日本酒に限らず、例えばフランスなどにおける葡萄酒の醸造の工程)、¹⁸⁾ 陶器の製造工程、等に見いだすことができる。それらのいずれの場合にも、特別な「技能」 ― とりわけ洗練された「腕前」 ― の持ち主がかかわっているであろう。

しかし、特別な留保条件なしに「技術」と呼べる営為が見いだせない訳

ではない。法隆寺・四天王寺に先だって造営されたとされる飛鳥寺において、本格的な寺院建築とブロンズの仏像の鑄造が、専門家である工人を朝鮮半島から招いて行われたのは6世紀末であった。その中で特に注目すべきは、造寺工と造仏工の育成である。

仏教美術研究者、大橋一章(1997)によれば、“当時の日本人は仏教文化の象徴たる仏教寺院を誰一人見たことがなかった。そこで仏教建築や金銅仏を建立・制作する外国人教師として百済から造寺工や造仏工が来日し、その指導のもとにわが国造寺工(寺師)と造仏工(仏師)が養成されたのである。やがてわが国第一号の本格的寺院として、飛鳥真神原には飛鳥寺が出現した。”¹⁹⁾ これら百済の指導者が迎えられたのは、『日本書紀』によれば、577年のことであったと言う。それから“およそ十年の歳月を費やして[日本人]見習い工たちは一人前の造寺工・造仏工として養成された”²⁰⁾と考えられている。

特筆すべきは蠟型鑄造法による中空のブロンズの仏像の制作である。これは明かに高度の腕前を必要とする「技術」であることに間違いはない。ここに有名な仏師・鞍作鳥(止利とも)が登場する。彼は鞍部村主司馬達等という渡来人(522年渡来という)の孫で、馬具職人の部民を統率する仏教信仰の厚い家の出身であった。馬具の制作は、そのデザインから始めて、ブロンズの鑄造まで様々な工程を含むものであったが、仏像の鑄造はその複雑さにおいて、比較にならないものであった。鞍作鳥は渡来した百済の造仏工の工房に入門し、その特殊技術を習得し、弟子入りした他の見習い工より優れた能力を発揮し、“頭角をあらわしていった”²¹⁾と考えられている。結局、彼は学習した技術によって飛鳥寺の本尊・飛鳥大仏や法隆寺金堂本尊の釈迦三尊像(623年)を完成させるのである。

この歴史的な事実、日本の歴史の中で「技術」を語るべきいくつかの重要な事件の一つであろう。

仏像と同時に語られる寺院建築は云うまでもなく、様々な建築物、家も技術による制作物である。アリストテレスも、制作的認識に論及しながら、しばしば例を家にとっている。日本の古代史の上でも色々な建築物が歴史

以前の文化文明の跡を引き継ぐものとして語られる。そして、歴史以前の時代に遡る考古学的な発掘発見がしきりに行われ、時代認定の科学的方法がますます厳密になるにつれて、様々な農耕技術・土木建築技術などのありようが明かになってくる。近年話題になった佐賀県吉野ヶ里遺跡や青森県三内丸山遺跡などの明らかにした建築土木の技術、食糧生産の技術などは、これらを「技術」と呼ばずに何とすることができるであろうか。そして、さらに時代を遡れば、種々の狩猟用具・石器・土器等の制作にみるような「技術」を見いだすであろう。

このようにして制作されたものが大規模であれば、相当の数にのぼる人々の協力が必要であり、役割の分担や系統的な監督指揮によって目的が達せられたに違いない。一方、小規模な制作にあつては、集団の力と言うよりは、共同社会の個人の作業によって制作が行われたであろう。いずれにしても、制作の過程で個人の「手腕」や「腕前」が発揮され、持っている「技能」 [=know-how] には個人差があつたであろうことは想像に難くない。しかし、制作の目的が社会的なレベルでの生存にある限り、それらをすべて含みながら、全体として「技術」を語ることができると思う。そしてそれは、明かにアリストテレスのいう「制作的認識」の発露である。

考古学者、安田喜憲 (1997) は云う：“この新しい石器製作の技法……。石刃技法はあらかじめ用意した石核から類似した石刃を連続して剥離する技法である。これによって石器の大量生産が可能になった。この技術革新は人類が一つの観念を長く持ち続ける能力を獲得したことを意味する。”²³⁾ このように考えるならば、アリストテレスのいう「制作的認識」は、遙か石器時代に遡ることになる。

以上の考察を要約するならば、筆者が「技術」と呼ぶものは、ヒトのある種の「認識」能力を礎として、何らかの目的のために、自然を模倣し、自然に手を加えて、生存を図る方法である。

II. 技術が技術でなくなるとき

しかしながら、技術が永遠不変の位置を保つことはできない。以下においては、技術がその名に値する位置づけを失う過程を、三つの視点から考察してみよう。

まず、上記の石刃の技法は、今日の我々の生活の中では殆ど技術としての意味を持っていない。例えば、石を素材とする彫刻家とか墓石などを石から造る製造業者の場合を除けば、石の節目を見極めて割るという手段によって達せられる目的を見いだすことはない。たとえ、その方法を用いる技能と知識があれば、同じことが成し遂げられるとしても、今日の生活文化の中でそれが重要な意味をもつような立場にいる人は少ない。従って、多くの人は石器時代人がその様にして石刃を造った事を知って、改めて驚き感銘するのである。ましてや、火をおこす技術などということを問題にすることは日常的にはおこり得ないであろう。

このように、かつては技術であったものがその意味と位置づけを失うに到ることがある。エディソン (Thomas Alva Edison: 1847-1931) は蓄音機の発明者としても知られているが、今日、「蓄音機」という言葉さえ古語になったと云ってよいほど、その技術は意味と地位を失い、むしろ、骨董品としての価値がより大きく認められるようになっている。エディソンの蓄音機では、始め蠟管に音の振動を刻むことによって音を記録し、再生した。それが、発条 (ぜんまい) 仕掛でターンテーブル上の円盤 (ディスク) を回転させる方式になり、さらに電気装置 (モーターと真空管など) を使う方式に発展した。今日では、この種のレコード・プレーヤーさえ旧式になり、テープ・レコーダーにその位置を譲り、さらに、レーザー・ディスクが発明されると、音をデジタル信号に変換する技術が一般的に用いられるようになってきた。

このような変化——一般には、「進歩」という——は、目的を同じくしながら、「制作的認識」の変化によって、種々の意味で技術の改善が起こり、結局、ある時期の技術が、もはや、技術とは云えなくなってしまった例で

ある。この種の変化は、今日、いわゆる「科学技術」においては日常茶飯事となっていて、「先端的科学技術」と云えども、その生命の長さは、必ずしも保障されているわけではない。

第二に、また、「制作的認識」だけではなく「目的」の変化に影響されて、技術の位置づけが変化する場合がある。わが国では、長い紙漉の伝統があって、和紙の種類が豊富であり、その質もきわめて高いものを含めて多様である。また、和紙の生産は、古来、全国にまたがって重要な産業でもあった。そして、和紙を漉くという技術は、わが国の歴史を通じて、その文化を支えてきたと云うことができる。²⁴⁾

しかしながら、小規模な生産手段に依存して和紙を漉くという過程は、これを科学技術の方法に置き換えることができない。従って、生産に時間を必要とすることも相俟って、大量生産によって社会の需要を満たすことができないという事態を生じる。わが国の近代化はそのような膨大な要求を紙の生産に突きつけたが故に、和紙のかつての高度な技術は、技術というよりは特別な「わざ」に依存する「技法」となった。それは、前節に言及した宮大工・西岡常一の場合と同様である。

明治維新の文明開化は、社会制度の大きな変化であったと同時に、欧米の学問・思想・文芸等の大々的な受け入れでもあったから、新しい情報を活版印刷によって大量の書籍として伝播する必要があった。つまり、手工業的な職人芸に依存する和綴じ本では間に合わないのであった。従って、それに代わって、活版印刷本に使うという目的に合致した洋紙を生産する製紙工場の科学技術が、紙漉の伝統を技法の位置に追いやったのは必然的な流れであった。つまり、これは、用途・目的の変化によって、技術を技術ということが難しくなった一例であるといえるであろう。

最後に、何らかの影響力が外部から及んで、同時に優勢な技術がこれに伴っている場合、伝統的な技術が減んでしまう場合がある。ここで思い到るのは、わが国への鉄砲の伝来（1543年）である。日本の歴史上、鉄砲伝来の事件がどの様にして起こったかは、屢説するまでもない。そして、日本人がどの様にして自分の手で鉄砲を造り、これをどの様に利用するに

到ったかも、²⁵⁾ここで述べる必要はなかろうと思う。

重要な事実は、日本刀は美術品としてその美しさの上で尊重されること、弓矢は一部の人々によって武道ないしスポーツの道具となっていることである。おそらくは、刀剣と弓矢は、人が狩猟によって命をつないでいた時代から続いてきた伝統的技術であっただろう。狩猟のみならず、人と人との、個々に、あるいは集団で戦う場合にも、これらが主要な道具となってきたのであろう。

しかし、一人ひとりの戦士が、身体之力と技量を利用して操る武器の代わりに、一旦、鉄砲という全く新しい武器——敵を倒すという目的のために用いる技術——が手に入ると、戦術も変化した。そのことが、日本史の上で一定の役割を果たしたと考えても間違いではあるまい。戦国時代が終り、いわゆる天下の統一が達成される。そして、時代が平穩に続くおよそ300年後、佩刀が禁じられる(1876年)に到って、刀と弓矢は敵を倒す武器としては完全に廃棄され、武術——居合抜きの技において真剣をもちいる他は、竹刀や木刀などを用いる；また、利雁矢、雁又のような実践的な矢じりも用いない——という技芸・スポーツの道具に変わってしまった。

以上では尽きない恐れは残るが、技術と見なすべきものが廃れてゆく過程を、試みに、三つの視点から区別してみた。すなわち、「制作的認識」の進歩による衰退、「目的」への不適合による衰退、「代替技術」の導入による変質、である。いずれの場合も、技術はもとの姿を変えながら、何等かの形で保存されているが、本来の意味での「技術」としての存在意義の変化を余儀なくされているのを考察することができた。古い「技術」の多くは、「技芸」ないし「技法」の意味において文化的に尊重されつつ、新しい「近代科学技術」に座を明け渡したのである。

III. 自然との関係における技術：開発

技術は自然から学び(“自然を模倣”——アリストテレス)、ときに、自然に手を加える(“自然のなしえないことを成し遂げる”——同)。これは“(天

然資源を)生活に役立つようにすること”(『広辞苑』1998⁵⁾)という「開発」の定義と相通づるところがある。「天然資源」すなわち自然の一部を(何等かの目的に)役立つように変える(実用化する)ことである。²⁶⁾

以下、技術の応用としての開発の種々相を、主に自然との関連において考察してみたい。

第一に、原人における開発が考えられる。原人が木ノ実を食べるという行為に留まるならば、そこに技術ということを口にする理由を見いだすことはできない。しかし、石器を造り、火を起こすまでに到れば(どちらが先であるにせよ)、既に述べたように技術の要素が現れて来る。その事を人類学者、埴原和郎(1997²⁾)は、人類が“文化のルビコン川”²⁷⁾を渡ったと、譬えて云う。彼によれば、今から70～130万年以前、原人は脳の容量が大きくなり、ほぼ900 cc.に達し、石器の用途も多様に分化し、他の動物との生存競争に打ち勝つようになった。筆者の言葉で言い替えれば、技術の進歩と身体の発達が互いに刺激しあってヒトの進化を促した。埴原は云う：“これらの文化的発達は食料の生産性や健康上の問題に直接結びつき、成長のパターンや出生率、生存率などに大きな影響を与えたに違いない。また石器をはじめとする道具の製作や使用、共同作業の必要性などは脳に刺激を与え、とくにコミュニケーションの手段である言葉の発達をうながしただろう。”²⁸⁾

このようにして、原人の段階から既に、一定の集団をなして共同生活を営んでいたことを考えれば、彼らが自然の中に、自然の一部として生きていただけでなくて、自然についての一定の知識を獲得し、それを応用して自然に手を加え、自然がなし得ないことを成し遂げていたことは明かである。²⁹⁾ここに、きわめて小規模においてであるが、「開発」と言えるような過程の痕跡をみとめることができよう。

次に、更に時代を下って5500～4000年まえ、前期～中期縄文時代の青森県三内丸山遺跡(その他)に見いだされる建築物の痕跡の大きさ、土木事業のごとき作業の痕跡を含む住居あと、食糧を確保するための植林と作物の栽培、他の地域との交流を証拠だてる出土品等々³⁰⁾をみると、筆者など

の遠い祖先であるかも知れない人々が、既に相当に発達した文化をもち、自然から得た経験的知識を技術として活用して、生活に役立てていたことが明かである。

しかし、三内丸山遺跡のある地域一帯は、遺跡の想像させるような大きな集落を彼らの集団が形成するまで、全く人手のつかぬ処女地であっただろう。そこに、縄文人の集団が定住して長い期間にわたって生活を営むことが可能になるためには、あるがままの自然に手を加えて、自分達の生活に役立つように「開発」の行為が行われたに違いないのである。

「開発」という用語は、今日では、特別な産業を起こして、自然の資源から富を獲得する意味に用いられるが、これまで述べたように、広い意味に用いられ得ることを先ず指摘しておきたい。

第三に、北海道の開拓における開発の一部分を考えてみる。米国マサチューセッツ州アムハーストにある州立マサチューセッツ大学の図書館最上階に「ライマン・ライブラリー」という一室ならびにその管理施設がある。ライマン (Benjamin Smith Lyman: 1835-1920) は、1872年に北海道開拓使に招聘されて地質調査に当たった地質学者であるが、この図書館には彼が9年間にわたって仕事をする傍ら、彼の日本趣味を満足させるべく収集した文書などが丁寧に保存されている。その中に、彼の指導のもとで1873年当時に作製された精密な地図があって、東は幾春別川の流れに沿って幌内炭鉱の在った辺りから、西はこの川が幌向川に合流する辺りまでの地勢が、今日国土地理院が作成するものと同じ精密さで描かれている。まだ鉄道もなく（測量の開始が1879年、手宮・幌内間の全線運行開始は1882年）、道路も橋も家屋の痕跡も全く記されていない地勢地図である。（道路と言えるような道路は、1876年に幌内と幌内太の間に開けたが、それまでは、この32 km. の道も「刈り分け道」であった。）おそらく、この地図が作成された時には、この辺りは、アイヌの人たちにとっては別としても、一般の日本人にとっては、蝦夷松が生い茂り、人が住めるとも思えない未開の森林であったと考えてよい。³¹⁾

しかし、20世紀を終えようとしている今日から一世紀昔を振り返ると、

この100年の間に人間が自然に加えた行為は、全く一方的な攻撃であったと言う他はない。炭鉱は閉鎖され、営々と積み重ねた農耕の結果として、見事に穂を実らせるようになった水田地帯も縮小され、今は、一部は休耕により荒れ果て、一部は宅地に、一部は小さな工場になっている。アスファルトの道路ばかりが縦横に造られ、鉄道は一部が廃線になっている。これが、この一世紀の間に我々が自然に対して加えた一方的な攻撃でなくて何であろう。しかし、人々はこれを「開発」と呼ぶのである。

しかし、この地の開拓については、人に対する直接の攻撃という場面がなかったと言えるのは、幸いと云うべきであろう。

最後に、海外における開発の一部を考えてみる。多くの場合、「開発」は真空の中では起こらないのである。ブラジルでの「開発」の進みかたについて、大江敏美(1996)は主にその華やかな側面を中心に紹介しているが、“アマゾン川流域の開発に対する外国人の声高い批判”³²⁾があるのに対して、“経済発展のためには、資源開発を実行せざるをえない。”³³⁾というブラジル人の考えを紹介している。つまり、子細に考えてみると、アマゾン川流域で“熱帯雨林の破壊”³⁴⁾が起こっているという事実と共に、根底において、スペイン・ポルトガルの植民地時代に形成された大農地所有制度に由来する政策のために、“先住民に対する政策”でも、“貧困の蓄積”を加速するなど問題が“深刻化している”³⁵⁾ことを付け加えているのである。

ブラジルには、インディオの部族にクリカチ族というのがある。³⁶⁾彼らの生活は熱帯雨林に囲まれた中で営まれ、森の生き物と原始的な農耕の収穫物で生きてきたが、ブラジル人(白人)の経営する牧場が次々と拡張され、彼らの森を侵食してしまった。牧場は有刺鉄線で囲われ、そこを侵すことはきわめて危険になった。その結果、クリカチ族は部落の近くで獲物を捕らえることができずに、時間を掛けて遠くまで出かけ、僅かの、しかも余り上質ではない獲物によりやうくありつくという結果になった。

白人の文明は、彼らに銃やトラックをもたらしした。それによって、クリカチ族の男たちは、遠くまで食糧を探しに行くことができる。また、森に高圧送電線を通すことと引き換えに、あまり映りのよくないテレビが与え

られた。しかし、先住民であるクリカチ族は、その結果として、決して豊かになった訳ではない。採れた獲物の質は低く、量は少ない。テレビを見て時を費やす子供は、必要な労働の技術と固有の文化を学ぶ時間を失うであろう。

原始的な狩猟採集を基本とする生活形態に対する、農業技術・牧畜技術を基礎とする社会の優位は否定できない。技術としての農業や牧畜からみると、自然の動物・植物の採取は、第II節で述べたような意味で、もはや技術とは言えないものである。そして、開発が、単に自然を対象とする破壊だけでなく、開発される土地と離れ難く結び付いて生きている人びとの生活を脅かすというかたちで、近代科学技術が支配する社会に、我々がいま生きているという周知の事実を、ここにあらためて示したつもりである。

IV. 接触する異質の技術

第II節で考察したように、ある技術が技術として衰える場合、制作的認識の変化に起因する場合を第一に挙げたが、それは、言葉を換えれば、技術の発達・洗練によって、目的をより有効に、能率的に達成することができる事によると云ってよい。近代科学技術の発達によるものである。

同じく、第二、第三に掲げた和紙の制作技術ならびに刀剣・弓矢の武器としての意味の変化においても、とって替わるべき新しい、より能率的な、目的適合性の高い技術との関連に於てであった。しかし、この第二、第三の場合は、技術としての意味の衰退をもたらしたのは、内的な制作的認識もさることながら、異なる起源をもつ技術との接触が契機となっていたと云うことを認めなければならない。たとえ、植物繊維を可能な限り純粋に、効率的な方法で取り出すという目的に関しては、和紙における紙漉は、洋紙の製造過程と原理的に異なる訳ではない。ただ、原料や、化学薬品の利用とか、大規模な機械の導入の点で、社会生活の実際的な目的に全体として合致する近代科学技術に劣ったという事である。

しかしながら、優れた紙漉の技量によって、洋紙とは異なる、質の高い

和紙が生産され、特に芸術など特別な目的のためには欠くことのできないものとなっている。すなわち、和紙は、グローバルな近代社会において洋紙のような広い用途に適合するものではないが、日本の伝統的な文化の中で、高い価値を失っていない。³⁷⁾

同様なことは、武器の近代化と、古来の伝統的な武術との間にも認められる。近代科学技術は原子爆弾やミサイルのような大量殺戮の手段を生み出した。わが国の古来の武器は実用性を失い、その優れたものは美術骨董品としての価値を高く認められている。海外の有数の博物館³⁸⁾には、日本の伝統的な武器が展示されているのも、美術的価値が高いからである。しかし、それらを実際に用いる必要はなく、既に述べたように、武道ないしスポーツとして、竹刀、木刀、木長刀、木槍などが代用されている。これらの代用品は、元来の武器使用に伴う技法・作法の教育、精神的・体力的鍛錬のために、その他の防具と共に使われている。その使用技術の意義は、日本文化の伝統に根ざすものである。従って、真剣を用いる居合抜きの技術と云えども、日本文化という、この範疇の中からはみ出るものではない。

近代科学技術は、その制作的認識が自然科学の急速な発達に従って、全体としての発達が著しい。元来、近代自然科学はそれ自体普遍的論理的な方法に基づいて発展してきたものである故に、それを応用し、それを内包する近代科学技術の普遍的特徴は明白である。今日、本来は土に根付いて成長し実を結ぶ農業生産物の一部が製鉄工場で季節を問わず作り出されるほどであるが、これを農業技術と呼んでよいのか迷うほどである。

しかし、既に述べたように、異なる技術の接触が、技術相互のみの関係にとどまるものではない。例えば、農業は自然に学び、自然を超えようとする営みであることは明かである。それは、狩猟・漁撈・採集の活動を基本として、森と海の資源を利用するという技術の大きな一部として始まった。日本列島の縄文時代をみると、農業は、それに伴う他の様ざまな技術と共に、人びとの生業を支え、これらの人々の集団に特有な生活様式・文化を作りだしたと考えられている。彼らの生活様式の特徴として、次の事柄が挙げられるという：①森と海の資源を利用する自然＝人間循環系の原

理；②集団のメンバー相互間の平等の関係；③情報伝達と交換のシステムの形成；④土器を中心とする制度化された美的・知的伝統；⑤女性を中心とする母権性の統合原理；⑥アニミズム的世界観；⑦他の集団の生活原理に対する柔軟さと先進性；⑧大規模な建築技術。³⁹⁾ 彼らの生活の舞台は、広い範囲にわたっていたが、特に本州中央部より東北側の落葉広葉樹林地帯に多くの痕跡を残している。縄文時代の推定人口は今日の関東地方に最も多く、ついで、東北地方であった。⁴⁰⁾

縄文時代中期以降になると、雑穀栽培の技術を基にした照葉樹林地帯の生活様式の痕跡が日本列島西部に濃くなり、特に、山地には、照葉樹林地帯特有の焼畑農業のあとが見いだされるようになる。焼畑農業は、九州・四国の山地で、1960年代に急速に姿を消すまで続いた。焼畑農業はいたずらに山地の森林を焼き尽くすものではなく、概ね、集団の管理のもとに、山林を不毛の地にしてしまわないように、一定の数々の技術を丹念に用い、信仰をも含む独特の文化と共に生き残ってきた。しかし、生産性の低さなどが原因となり、その伝統的技術と文化は消滅しようとしている。⁴¹⁾

次に、縄文時代末か弥生時代になると、稲作技術を伴って新しいタイプの人たちの集団が日本列島に渡来した。稲作技術は、縄文人とは異なる世界観と社会的・政治的統合原理を伴うものであった。また、技術の面でも武器や儀式に用いられる青銅器・鉄器などの金属器をもたらしした。縄文晩期に、既に渡来した雑穀栽培の下地があったと推定されているが、北九州から短い間に稲作技術は西日本に広がり、程なく、今日の中部地方の西縁——愛知県西部から若狭湾にいたる地帯⁴²⁾——にまで到達する。そして、推定の人口密度は、縄文時代と逆転するにいたる。⁴³⁾

しかし、弥生時代に稲作技術がもたらしたもののうち、最も強く今日に影響を及ぼしているのは政治的統合のイデオロギーであったと思われる。その端緒は水田の造成である。縄文人の集落には個人の土地はなかった。また、渡来人でも焼畑農業を営む人々は部落を形成し、山林・山地は部落の共有地であり、作業はすべて部落の共同作業であった。これに対して水田の造成、土地を仕切った人は、その個人的所有者となった。⁴⁴⁾ そして、よ

り多くの収穫をあげる技術の持ち主は尊敬され、富と地位が認められるようになる。さらに、水田には水を引き入れる灌漑の仕組みがなければならない。それは、一個人の勝手に済まない領分であるのが普通である。水田を所有する他の個人の利便を考慮しなければならず、必然的に水田所有者同士の利害関係を生じる。かくて、水田の開発には耕地の編成・整理などが、何等かの意味でより力のある個人の指揮・指図のもとに行われることになるであろう。⁴⁵⁾

水田を耕作する稲作技術の段階に到れば、このような力ないし権威の有無が重要な意味をもつようになり、その力ないし権威を合理化し集団に納得させる方法が講じられることになる。すなわち、政治的統合のイデオロギーの初歩的段階である。このような権力が次第に認められ、強化され、階層化した社会が生まれれば、古墳時代をへて、様々な政治的事件を巻き込んだ我々の歴史時代への移行も納得できる訳である。

しかしながら、一方、過去に栄えた縄文人との関係はどうなるであろうか。日本列島における新旧二つのタイプの技術と文化の交替は、どの様なおこり方をしたのであるだろうか。

稲作技術をもたらした渡来人は、縄文人とは、同じモンゴロイドながら、異なるタイプの人々であったという。稲作技術をもたらした人たちの出自は必ずしも同一の地域であるとは考えられていないし、また、一度に押し寄せるように渡来したという証拠はなさそうであるが、いずれにせよ、彼らが縄文人を武力で制圧し、滅ぼしたのではないと考えられる。縄文人が縄文晩期には雑穀類の栽培技術を知るようになっていたと考えられ、それも原因となって、縄文人が稲作技術を比較的容易に受け入れることができたであろうと想像されている。従って、“若干の社会的摩擦はあったとしても、大きな文化的摩擦をひきおこすことなく、比較的スムーズに”⁴⁶⁾異なる技術の出会いと移譲が行われたようである。また、渡来人の側でも、縄文人と共通の慣習をもっていたばかりでなく、“土器や石器の製法、各種の道具をつくる技術、植物の採集や栽培、竪穴住居、丸木舟の製造などといった日常生活文化にかかわるような諸要素は、縄文文化のそれをひきつい

でいる⁴⁷⁾と推定されている。

また、稲作技術が普及しても、“日本列島の全土が一樣に稲作化されたわけではない。平野部の一部が開拓され、水田化される一方、ニッチェ（生態的地位）の異なる丘陵・斜面や山地には、その後も長く非稲作的な生活様式の特色をもつ人々が居住していたと考えられる⁴⁸⁾”としたら、稲作技術の伝播は緩やかな速度で徐々に進行したと考えるべきであろう。

このように見てくると、明かに稲作農業の技術が縄文人の狩猟・漁撈・採集の技術より生産性が大であったことから、日本列島の全体にこれが拡大したことは不思議ではないが、また、同時に、優位にたつ技術が、今日の先端的科学技術のようにではなく、徐々に浸透したという過程は、なかなか興味深いものがある。

縷々述べたような、稲作農業技術が先行する技術を凌駕した過程の大筋において、異なる技術が接触する場合、種々の条件があることは当然としても、目的適合性と制作的認識において優れている技術が、他を技術の位置から蹴落として「開発」の主導権を握ること、そして、結果に於て、社会構造に重大な変革を来し得たのである。ただ、太古の日本列島におけるこのような開発と変革は、その特色として、一方的にではなくて、相互作用的な過程として生起したことに注目したい。⁴⁹⁾

V. 文明と文化の相互作用

このように、歴史以前の農業技術について縷説した理由の一つは、それが開発行為と技術相互間の関係を比較的単純に論じられるからに過ぎない。近代科学技術についてならば、アリストテレス的な意味における技術の要素の種々相が複雑に絡み合っていて、それを解きほぐすことは遥かに難しい。本節においては、可能な限り、その点に留意して論をすすめようと思う。

しかし、まず、古代の稲作農業と云えども、時代を下るに従って、それに伴う文化的な諸相が無視できないほどに明かになってくる。古墳時代に

対する一般の関心を高めた飛鳥の地は、飛鳥川の流れを中心とした四方2 km 程の丘陵の間の狭い谷あいには百済の渡来人が集中的に居住したところである。また、6世紀末から7世紀中葉に到るまで、古代天皇の住居つまり宮（＜御屋 [ミヤ]）がつぎつぎとこの地に建てられ、⁵⁰⁾ 豪族の墳墓らしきものなど数多くの遺跡が残されている。つまり、ここは、権力と渡来人のもたらした文化が集中していた地域であった。また、この時期に、隋代の中国との交流のなかで、国家としての体制を整えたのは、自然と直接・間接に関連する技術だけでなく、それらに伴う精神的文化（特に、仏教と儒教）や統治の体制（冠位十二階のような官僚組織、十七条の憲法のような法体系、賦役令のような税制など）に基づくものである。このような出来事は、渡来人のもたらした技術と文化と在来の技術・文化との関係を抜きにしては語ることが出来ないであろう。

飛鳥を発して、支配者である天皇は、やがて、これより約2 km 足らず北の藤原に、より大きな都（＜宮 [＜御屋] 処）をつくり、さらに（短期的に他の地におかれたこともあるが）都は奈良、京都、東京へと移って今日に到っている。このような遷都の度毎に都市は整備され、（東京は別として）宮殿の造営が行われ、寺社・仏閣と共に、建築技術の発達が具現化してきた。つまり、都市開発が進んできたのである。

この種の開発に伴う大小様々な社会問題があったことは、想像に難くない。『日本書紀』（588年の条）には、最古の本格的な寺院と言われる飛鳥寺の建設予定地には、既に住みついていた、飛鳥衣縫造祖樹葉 [アスカキヌヌイノミヤツコノオヤコノハ] という人の家があり、その“家を壊ちて、始めて法興寺を作る”と記録されているという。⁵¹⁾ この人にしてみれば“降って湧いたような災難で、まことに迷惑な話であろう。しかし、仏教という新しい文化文明の拠点を築くためには立退きもやむをえなかったのかもしれない。おそらく…… [この人] はわが国における開発推進のための立退きを余儀なくされた犠牲者第一号といえる。”⁵²⁾ と言われる。云うまでもなく、この人とその一族は自らの生活文化を放棄させられるのである。相当の期間にわたって、安心して日々を送っていた暮しの温もりを奪われ

る事になるのである。

ところで、これより約1400年後の現代20世紀においては、開発の問題は、『日本書紀』における記述の簡単さは云うまでもなく、事実においては遥かに複雑である。しかし“新しい文化文明の拠点を築くため”⁵³⁾ というのと同じ様な論理が働いている事は、今日においても普通である。

そこで、今日のかつ地球的規模の視野にアングルを移してみると、例えば、アメリカのあるシンクタンクが作成した報告書「低開発諸国の近代化」(1961)には、“近代化のための具体的政策提案”が述べられているが、その背後には“ある考え方、前提といったもの”⁵⁴⁾があると想定されるという。このことは、古代日本の飛鳥村におけると同じだと思われる。

アメリカ大陸において、メキシコは合衆国からみると近代化を必要とする地域(国)である。ダム建設工事や農地改革など、種々の面で資金・技術の援助を、合衆国はメキシコに与えてきた。これは、近代化のために、合衆国が開発の指導者として振舞ってきたことを意味する。すなわち、近代化という科学技術に裏付けられた普遍的価値をメキシコにおいて実現しようと努力したことを意味する。

一方、メキシコ人は近代化の意味を理解することはできるのであるが、その価値は「アメリカ的価値」であって、それを自ら具現化することは殆ど不可能であると感じる。つまり、アメリカ人のように考え、振舞おうとしてもできないという。“メキシコ人は、そこにどれほど長く住んでいようと、決して「アメリカ人」と間違われることはない。まわりの人々と同じ言葉を話し、同じ服装をしてはいても「他所者」であることは一目瞭然である。それは身体的な特徴の違いというよりは、その「態度」から分かてしまうのだ。”⁵⁵⁾ という。このようなメキシコ人の心の葛藤は、引用されたメキシコ人の言葉によれば、執拗にアメリカ人のようになる——異なった存在になるという願望を持ちながら、“それに見放された”状況において、“保護者も持たず、有効な価値観も持たない孤児”として“世の中に対してその違いを肯定するいたましい緊張”⁵⁶⁾と捉えられる。

このように、メキシコなど、後発の諸国は、自ら“選んだ「開発」とい

うものが、必然的にこのような価値の宙づり状態をつくりだす営みにほかならなかった⁵⁷⁾と云うことを見いだす。合衆国は移民の国であり、多様な異なる文化、価値観をもった人々をそのままに受け入れるという事で成り立っているという原則的な理解が許されるならば、この様な価値の宙づり状態は、階層や出自の違いによって、国内でも生まれる可能性があり、事実、生まれていると考えられる。

確かに自由・平等の理念、アメリカン・ドリームというような抽象的な価値観は成り立つが、それは、余りにも一般的・普遍的で、全ての合衆国国民に、本当の意味での文化的価値観として受け止められているのか疑問なしとしない。理念と文化的価値観は同じではない。メキシコ人がこれでこそ自分はメキシコ人であると自己確認できるような意味での文化が、合衆国の国民であるアメリカ人に、アメリカ文化として根付いているだろうか。アメリカの価値観は、誰にでも押し付けられるけれども、本当に安んじて受け入れることは難しい理想なのではないか。アメリカ的価値は、科学技術に裏打ちされた合理性、ならびに、制約無しに富を獲得できる自由という判断基準であり、そのみをもって、“宙づり状態”でなく、帰属意識をもって生きられる社会の価値観を創り出すことは難しい。⁵⁸⁾この事を、メキシコへの開発援助は物語っているように思われる。

すなわち、近代の科学技術は、古い技術を乗り越え克服し、諸文化を均質化しながら、普遍的に広がることができるとしても、それは、多様な文化的な営みとは異なる次元にあり、文明の全てではなく、その近代的様相の一側面である。⁵⁹⁾

従って、近代科学技術によって可能になった経済社会体制が、古来の技術がそうであったように、人々の社会生活全体に影響を及ぼした結果として、新しい生活様式と生活意識を生み出すという結果を生じる。筆者は、経済学者、佐和隆光（1991）のように技術そのものを文化であるとは考えないのであるが、生活文化が技術革新によって変化する可能性を否定するものではない。⁶⁰⁾例えば、各個人が自分のための乗用車をもち、一家に2台以上の車があるというような状況は、西欧文明と同時に取り入れた個人主

義の思想を強化するという文化的影響を及ぼしたことは間違いない。⁶¹⁾テレビやパソコンの普及が及ぼした影響は云うに及ばずである。時には、「文化の幼稚化」(柄谷行人)というべき現象さえ起こっている。また巨大な科学技術産業が、産業の生きる場である市場経済において、富の分配の不平等を助長し、資源配分をゆがめ、自然環境をも破壊する。かくて、弱者の生存をも脅かすのである。⁶²⁾

しかし、“巨大技術の開発は、たんに自国にとっての必要性のみならず、国際的な視野のもとでの必要性にも、それなりに応じうるものでなければなら”ないであろう。“その意味で、いまや巨大技術の開発は「国際公共財」すなわち、なんらかの公共的機関の資金負担により提供されるけれども、世界各国が必要に応じて便益に浴せるような「公共財」としての性格を帯びてきた”⁶³⁾と考えられる。すなわち、筆者のいう近代技術と文明一般の普遍性をここにみるのである。

しかし、近代科学技術文明の特徴は、他の文明と異なる側面を示す。すなわち情報化である。

全ての個人が情報の送り手であると同時に受け手でありえるようなインターネット化によって、情報は常に流れ、それが何処へ届き、誰に受け取られるかも予知できない状況が生じている。かつては、知識、技術、情報が特定の場所——例えば、大学、図書館、寺院など——に蓄積されていて、そこへアクセスすることによってのみ、知識・情報を手に入れることができた。しかし、今日では社会の状況は変わっている。つまり、社会が一定のロケーションに技術・情報をストックしている状況ではなくて、社会全体に情報が不確定的に流れているフロー型に変化してしまっている。いわゆるソフトな流動化した状況が現出し、「けじめ」「バリアー」と云ってもよい)が曖昧になっている。

“勤勉や節約を重んじる古典的な倫理観もまた、ストック思考あるいは計画の思想と分かちがたく結び付いている”が、“ストックからフローへと人々の思考が転換すれば、こうした倫理観も同じく修正を迫られるであろう”⁶⁴⁾と考えられる。その結果、“倫理的空白の時代が到来し、……さらな

る技術革新へと人びとを駆りたてる「活力」⁶⁵⁾も減退するおそれがある。このような状況の中で、経済界も金融投資が中心となり、富の追求において「銀行も合併・買収の仲介をして、手数料を」⁶⁶⁾稼ぐだけになり、「他人が生み出した価値をいじくりまわす寄生虫産業」⁶⁷⁾という「虚業」に墮落するとさえ言われる。つまり、制作的認識（技術）によって社会を支える実体的経済の基礎が地盤沈下を起こしているという危機感が、このように表現される訳である。

経済学者が思い描く巨大科学技術の社会的文化的影響は、このように暗澹たるものであるが、ひとつ興味深いのは、科学技術と情報化が人々の倫理観や思考方法に影響を及ぼし、それが、逆に、科学技術の展開に反作用をおよぼすという考察である。佐和隆光は70年代の日本経済について、技術と文化〔＝ソフトな技術⁶⁸⁾〕の相互依存性について語っているが、⁶⁹⁾この双方向性は、日本経済が好調時を過ぎた今日においても妥当するものである。

以上のような本節の考察は、古代においても現代においても、文明と文化の間には、技術を媒介とする相互作用が存在することを示すものである。これが、本節の考察である。

VI. 結 び

文明にせよ文化にせよ、人間がつくる社会の要素である以上は、そのロケーションを必ずともなっている。従って、これらを論ずるには、自然環境も含めた様々な空間的・時間的条件を考慮しなければならないのは勿論である。一般に、文明と文化には、例えば、「エジプト文明」とか「江戸時代の文化」のように何等かの修飾語が伴うのはそのためである。

しかし、本稿では、それらを考慮しつつも、アリストテレスの技術論に導かれて、より一般的・抽象的に文明と文化を論じてきた。この二つの概念は重なりあう側面があることが否定できないが、前稿でたてた区別を変更するには到らないで論考を終わることができたと思っている。

そして、更に、文化と文明を技術という中立的な概念を媒介として関係付け、おもに「開発行為」を通じて、技術が、この媒介的機能を演じていること、一般には、文明が文化にしばしば阻害的な影響を与えるが、変質した文化がまた文明の支えとなり、逆に、障碍となり得る、という意味で、相互関係を示すことを論じることができたと考える。(未完⁷⁰⁾)

註

- 1) 本稿をまとめるに当たって参考にした論考の一部についてコメントを加えておきたい：

以下の3点は、著者の主観的な意図が比較的強くでているために、利用することができなかった：森谷正規『文明の技術史観』中公新書、1998；甲斐義幸『科学文化論——人と自然を結ぶ』朝倉書店、1998；宮原一武『文明の構造と諸問題』近代文芸社、1998。

テオドール・リット／小笠原道雄訳『技術的思考と人間陶冶』玉川大学出版部、1996。は、ドイツ語の原題に照らして活用が可能かと思われたが、文化・文明との関連が希薄であった。今井道児『「文化」の光景——概念とその思想の小史——』同学社、1996。は、興味ある論考であるが、偏りが感じられた。例えば、W. von Humboldt を取り上げない理由が不明である。

上野堅實『タバコの歴史』大修館書店、1998。は、岡野 哲(1997)が取り上げたタバコの意味について、広い歴史的視野から精密で有益な資料を提供するものであるが、これについては、再論することは控える。

家永三郎『歴史家のみた日本文化』雄山閣出版、1996。は今後の研究に役立てたいと考える。

そのような理由により、上記は参考文献リストには加えない。

- 2) 筆者が1996年度に担当した講義〈言語と文化〉の冒頭に、湘南国際村センター開村記念シンポジウム“東西文明の出会いと人類の未来”(NHK教育テレビ1994年8月27日放映)の録画を活用したが、その際の議論は、彼の論文「文明の衝突？」(1993)をめぐる進められた。
- 3) ハンチントン(1998), p.55.
- 4) 同書, p.312.
- 5) 飯田賢一(1995), pp.62~107.
- 6) アリストテレス(1973 a), p.22.

- 7) アリストテレス (1973 b), p.25 および p.30.
- 8) アリストテレス (1973 a), pp.248 f. および アリストテレス (1973 b), p.163 参照.
- 9) アリストテレス (1968), p.75.
- 10) アリストテレス (1969), p.135.
- 11) 同所.
- 12) アリストテレス (1968), pp.73~81. 参照.
- 13) ある種の生き物が、ヒトとよく似た行動を示すのを見て、我々の方が感情を動かされることがある：例えば、“やれ打つな蠅が手をすり足をする” (一茶) のように。誰も蠅が人間と同じ振舞いをしていると、本当に思っている訳ではないのだが、ヒトも同じ生き物であるという共感が、時として起きる。以下、猿の行動についても同様.
- 14) 埴原和郎 (1997²), p.38.
- 15) 飯田賢一, 上掲書, pp.134 f. 参照.
- 16) 森 澄雄 (1999), pp.14 f. 参照.
- 17) 寿岳文章 (1996) 参照.
- 18) 窪寺紘一 (1998) 参照.
- 19) 大橋一章 (1997), p.7.
- 20) 同書, p.169.
- 21) 同書, p.146.
- 22) 例えば、伊勢神宮の正殿の建築様式は、梁、桁の外側に棟持柱が配置されている点で加茂神社、春日大社、その他すべてと異なっていて、縄文中期頃からの高床式建築と同じであるという。神社以外のものと同じ蔵の形式を持っているのは、天皇を主祭神とする神宮としては疑問のでも処らしく、榎村寛之 (1997) はこの点を論じている.
- 23) 安田喜憲 (1997), p.55.
- 24) 寿岳文章, 上掲書参照. 今日、平常の生活の中で用いられる紙は、上質紙、中質紙、など印刷に用いられるもの、塗工紙 (美術書用など)、特殊印刷紙 (手形用など)、情報紙 (新聞用、PPC 用紙、感熱記録紙) などであるが、和紙はこれらの実用紙とは別の、装飾、書道、日本画、障子、襖などの用途にもちいられる。優れた和紙は伝統産業として生命を保っている。
和紙は全国各地で特色あるものを産出していたが、“明治維新という歴史の大転換は、日本国中の製紙地図を塗りかえ” (上掲書, p.316) た訳である。しかし、明治時代にいたっても、農村ではガラス窓はなく、学校教育で手習い

に和紙を使った事から、板や蓆に代わって、明りとり、持ち帰った半紙が用いられるようになったという。家の中が明るくなった事の意味の大きさについて、色川大吉(1997)は声を大にして強調している程である(同書, p.42)。しかし、近世、中世、古代を通じて、わが国では紙の生産は大切にされ、絶える事なく続けられた。17世紀の始めには48種類の紙の在庫が、駿府城内にあったという記録がある(寿岳文章, 上掲書 pp.282 f.)。さらに、8世紀に遡ってみても、律令国家の成立と歩調を合わせるように、約50年の間に様々な種類(233種の名称)の紙が納められた事を示す資料が正倉院文書から明らかになった(同書, pp.105~108)。

和紙は写経や歌会はもちろん、事務的記録や文化財的書物、美術品に用いられてきたが、江戸時代中期、江戸では同業者組合が作られ、その中に、和紙と関係がある次のような職種があった：扇屋、鼻紙袋屋、絵物屋、唐紙屋、紙子屋、障子細工屋、水引屋、屏風屋、提灯屋、はりこ屋、紙漉屋、うちわや、など(乾 宏巳(1996), pp.78 f.)。また、芭蕉の書簡集をみると、半紙、打ち紙、杉原紙、小紙、石摺大色紙、蠟地紙、など、送られた事を礼状に書いている(萩原恭男(1976)参照)。

また、笠原和比古(1993)に見るような、参勤交代の途すがら、領主が篋の中で『源氏物語』などの古典を読んでいる記録は、日本の文化の伝統が和綴本と共に、脈々と伝わってきたことを物語っている。

25) 黛 弘道他編(1997), p.130. 参照。

26) 『広辞苑』(1998⁵) <ぎ-じゅつ>②：“(technique) 科学を実地に応用して自然の事物を改変・加工し、人間生活に役立てるわざ” 参照。

27) 埴原和郎, 前掲書, p.50.

28) 同所。

29) 例えば、土を掘り下げて住居とすることもできたであろう。発掘された多くの遺跡が示すように、食料とした獣類・魚類の骨などは、他の残渣と共に、一定の箇所にとめて捨てるという習慣も獲得したであろう。また、埋葬の跡は云うまでもない。

30) 佐々木高明(1997), pp.146 f. 参照。

31) 岩見沢市文化財保護委員会(1971), pp.28 f. 参照。

32) 大江敏美(1996), p.2.

33) 同所。

34) 同所。

35) 同書, p.3. 参照。

- 36) クリカチ族の生活文化に対する近代牧畜農業の影響についての記述は、NHK で放映した映像による。プログラムの題名、放映の日時、録画の日時については記録を消失したが、1996 年に担当した講義〈言語と文化〉の中で学生に提示した教材の一つである。
- 37) 上記の注 24) 参照。
- 38) 海外旅行の際に訪れた有数の博物館に、日本の刀、鎧、兜などが、他の美術作品と同様に展示されているのを見た日本人は少なくないと思う。筆者はそのような海外経験が少ないのであるが、大英博物館、ロンドン塔、ボストン美術館 (Museum of Fine Arts) などでそれらに出合ったことがある。
- 39) 安田喜憲、前掲書、pp.26～30. 参照。
- 40) 工藤雅樹 (1998), p.120. 参照。
- 41) 佐々木高明、上掲書、pp.41 f. および pp.171 ff. 参照。
- 42) 同書、p.278.
- 43) 工藤雅樹、上掲書同所参照。
- 44) 吉田 孝 (1997), pp.151 ff. など参照。
- 45) 佐々木高明、上掲書、pp.287 ff. および pp.295～300 など参照。
- 46) 同書、p.279.
- 47) 同書、p.46.
- 48) 同書、p.282.
- 49) 例えば、弥生時代からの呪術的民間宗教としての神道と、大陸から導入された仏教との間の交流、神宮寺や八幡宮などの意味については、吉田 孝、上掲書、pp.176 ff. 参照。
- 50) 亀田 博 (1998), pp.8 f. 参照。
- 51) 大橋一章、前掲書、p.164.
- 52) 同所。
- 53) 同所。
- 54) 岡本眞佐子 (1996), p.13.
- 55) 同書、p.74.
- 56) 同所。
- 57) 同書、p.85. なお、ネパールにおける「開発」の、ネパール人の意識への影響が、南 真木人 (1999) で取り上げられている：“開発は、第一義には経済発展や貧困の撲滅などを目標としていても、実にさまざまな文化変容をもたらしている。ときに開発が暴力に譬えられるのは、世界の見方や自画像までも変えてしまうほどの強い力を開発が内包しているからである。それは、

経済を世界システムに従属させるにとどまらず、文化的な価値までも西欧文明に収斂させ、それまであった別の価値観を侵食していく過程なのである。”(p.199)

- 58) タカキ, ロナルド(1995), p.714. ここでは“多様性を、「文化戦争」「われわれ」と「彼ら」との間の闘争と定義”するような“文化的には覇権主義のままである伝統的なヨーロッパ中心主義”を反映するメンタリティが、“実際に「アメリカを分裂」においやりつつある”という考え方を紹介している。
- 59) ハンチントンはアメリカを含む西欧文明の危機を極度に強く意識しているのであるが、自由・個人主義・法の前での平等・私有財産制などという西欧文明の価値観が内部から危機に陥れられていると感じる。そして、“多文化主義という名目で、……アメリカの西欧文明との一体化を批判し、アメリカ人に共通の文化が在ることを否定し、人種や民族をはじめとする国家より下位の文化的アイデンティティや集団の形成を奨励”する事に反対している(上掲書, p.468.)。そういう考えでは、“どの文明にも属さず、文化的な核をもたない国”(同書, p.469)になってしまう。“文化的な核をもたず政治的信条だけで規定された社会に安住できる場所があるだろうか? 政治的な原則は、永続的な社会を築く基盤としては不安定である。”(同書, p.470) ハンチントンは、このような全く正当な認識を示しながら、そのようにしてアメリカ合衆国が終焉を迎えることになりかねないという危機感を払拭するために、殆ど排他的とも思えるほどに西欧的価値観を柱にした文明の維持の必要を強調している。覇権主義的に“伝統的なヨーロッパ中心主義”の WASP 文化に固執しているように思われる。
- 60) 佐和隆光(1991), pp.28 f.
- 61) 同書, p.46.
- 62) 同書, pp.95 f. 参照.
- 63) 同書, pp.116 f.
- 64) 同書, p.146.
- 65) 同所.
- 66) 同書, pp.196 f.
- 67) 同所.
- 68) 同書, p.193.
- 69) 同書, p.122.
- 70) 岡野 哲(1997), p.27. の注 54) において、“Ⅲ. 文化・文明と技術”と記したのが本稿である。“Ⅳ. 言語の所在; Ⅴ. 言語と文化”と記した課題は、

「言語と文化」考(3)としてまとめることになるう。

文 献

- アリストテレス (1968) 『自然学』 (アリストテレス全集 3. 出 隆・岩崎允胤
訳) 岩波書店
- アリストテレス (1969) 『気象論』 (アリストテレス全集 5. 泉 治典訳) 岩波
書店
- アリストテレス (1973 a) 『形而上学上』 (岩波文庫: 出 隆訳) 岩波書店
- アリストテレス (1973 b) 『形而上学下』 (岩波文庫: 出 隆訳) 岩波書店
- 榎村寛之 (1997) 「伊勢神宮の建築と儀礼 ―棟持柱建物は神社建築か?―」
上田正昭編 (1997), pp.302~313.
- 芳賀 徹編 (1993) 『文明としての徳川日本』 (叢書比較文学比較文化 1) 中央
公論社
- 萩原恭男校注 (1976) 『芭蕉書簡集』 (岩波文庫) 岩波書店
- 埴原和郎 (1997²) 『日本人の誕生』 吉川弘文館
- ハンチントン. S. (1998) 『文明の衝突』 (鈴木主税訳) 集英社 [The Clash of
Civilizations and the Remaking of World Order, by Samuel P. Hunting-
ton. 1996.]
- 飯田賢一 (1995) 『技術』 (「一語の辞典」) 三省堂
- 乾 宏巳 (1996) 『江戸の職人』 吉川弘文館
- 色川大吉 (1997) 『明治の文化』 (同時代ライブラリー 307) 岩波書店
- 岩見沢市文化財保護委員会 (1971) 『岩見澤開拓の先駆者 ―氏族移民入植―』
岩見沢市教育委員会
- 寿岳文章 (1996) 『日本の紙』 吉川弘文館
- 亀田 博 (1998) 『飛鳥の考古学』 学生社
- 笠原和比古 (1993) 「参勤交代の文化史的意義」 芳賀 徹編 (1993), pp.135~159.
- 工藤雅樹 (1998) 『古代蝦夷の考古学』 吉川弘文館
- 黛 弘道・鈴木英雄・大石慎三郎・鳥海 靖編 (1997) 『概説日本史』 有斐閣
- 南 真木人 (1999) 「「開発」から生まれる文化」 田村克己編 (1999), pp.188~203.
- 窪寺紘一 (1998) 『酒の民俗文化誌』 世界聖典刊行協会
- 森 澄雄 (1999) 『俳句に学ぶ』 角川書店
- 大江敏美 (1996) 「開発と文化の諸相 ―南米 3 か国に見る」 北海学園大学開発
研究所 『開発論集』 第 57 号, pp.1~12.

大橋一章 (1997) 『飛鳥の文明開化』 吉川弘文館

岡本眞佐子 (1996) 『開発と文化』 岩波書店

岡野 哲 (1997) 「文化と文明——「言語と文化」考(1) 北海学園大学人文学会
『人文論集』第9号, pp.1~29.

佐々木高明 (1997) 『日本文化の多重構造』 小学館

佐和隆光 (1991) 『文化としての技術』(同時代ライブラリー72) 岩波書店

タカキ, ロナルド (1995) 『多文化社会アメリカの歴史』(富田虎男監訳) 明石
書店

田村克己編 (1999) 『文化の生産性』 ドメス出版

上田正昭編 (1997) 『古代の日本と渡来文化』 学生社

安田喜憲 (1997) 『縄文文明の環境』 吉川弘文館

吉田 孝 (1997) 『日本の誕生』(岩波新書) 岩波書店

『広辞苑』(1998⁵) 岩波書店